

脳科学と欲望と幸福

稲垣久和

1. 脳科学との関係

幸福とは何か。西洋においてはギリシャ哲学、とくにアリストテレスの *eudaimonia* 以来の倫理学のテーマであった。*eudaimonia* の解釈は 18 世紀の功利主義において快・不快が善悪の基準となり快と自己利益が結び付き「自己利益を最大化する方向に行動する人間」(*homo economicus*) という人間観を善とする経済学の成立となった。これは自由主義陣営においては今日まで続いている。最近では経済学内部からの「合理的な愚か者」などの批判から、人間の利己的よりも利他的な面の重要性も指摘されるようになった。経済も先進国が低成長の時代に入り、かつての生産主義から脱生産主義の方向を模索している。脳科学においても個体における欲望やそれとは逆の慈悲などの探究が進められている。利己主義と利他主義の出所はどこか等々。今回は脳科学や哲学における自己論と欲望や慈悲について検討したい。

フリーマンの脳理論は自己について次のようにいう。

『脳はいかにして心を創るのか』179-180 頁。「われわれ自身の構成は、無数のニューロンを含む集団のカオスダイナミクスが生み出す神経活動パターンの豊饒さに依存しています。われわれの志向的行動は連続的に世界に向かって流れ出し、世界とそれに対するわれわれの身体の変化させます。このダイナミックなシステムが、われわれ一人一人の自己 (*the self*) なのです。われわれは世界との関わりにおいて、己の境界の内部からそれを知覚し、自分自身を同化によって変化させます。・・・「自己への気づき」は、意識のそれとは異なるレベルの組織化を意味しています。それは人間のみが存在するレベルであり・・・辺縁系は、多感覚の収束と発散、脳幹諸核に対する制御、また時空間に関わる脳領域に対する優先的なアクセス等のために、神経活動を気づきへともたすための主要な通路および統合の焦点として進化したと考えられます。それは時々刻々と現れる経験の統一性を媒介する大域的アトラクターのベイスンへの接近を促進するように思われます。とはいえ意識と自己意識は、辺縁系であれ、前頭葉および他のいずれの部位であれ、脳のある局面に宿るものではないのです」。

パンクセップ (*Jaak Panksepp*) は自己意識が辺縁系よりも脳幹の方にその重要な起源があると見ている。彼は最近の **The Archaeology of Mind: Neuroevolutionary Origins of Human Emotions** 2012 という本の第 11 章を「魂の神経生物学に向けて—自己核と原初過程感情の創成」(“*Toward a Neurobiology of the Soul: The Core SELF and the Genesis of Primary-Process Feelings*”) と題して伝統的な“魂”概念の脳科学的な解明を試みている。そして理性よりも情動が本質的であるとしてデカルトの古典的な「われ思う、ゆえにわれあり」の命題を「われ感ず、ゆえにわれあり」に置き換えることを提唱している。

・パンクセップの脳の三層構造

一次的情動 (視床下部・脳幹)・・・*seeking* (探索、欲), *lust* (貪), *care*, *rage*, *fear*, *panic*, *play*

二次的情動（大脳辺縁系）・・・empathy, trust, blame, pride, shame（慚）, guilt（愧）,
三次的情動（大脳皮質）・・・names of feelings, mentalization, distancing skills,
containment（感情の虜となること、煩惱）, mindfulness（心の豊かさ、思いやり、慈悲）

2. 哲学との関係・西田哲学から

・「自己が自己において自己を見る」（西田幾多郎「私と汝」1932年）という三層の自己論（拙著『宗教と公共哲学』137頁）。

・「自己が自己に於て見ると考へられる時、自己が自己に於て絶対の他を見ると考へられると共に、その絶対の他は即ち自己であるとみふことを意味していなければならない」。

① 私（I-nessの意識）が「絶対無の場所」において「真の自己」を見る（十牛図）

② 私が「絶対の他」において「真の自己」を見る。（西田「私と汝」）

③ 私が「PAG」において「真の自己」（SELF）を見る。（SELFはパンクセップ脳理論）

④ 私が「アーラヤ識」において「真の自己」（SELF）を見る。（浅野孝雄）

⑤ 私が「イエス・キリスト」において「真の自己」（SELF）を見る。（稲垣）

- ・①「絶対無の場所」とは己事究明の禅のテキスト「十牛図」第8図の「空なる円相」
- ・②西田の自覚の理論（場所的論理）の中で「自己の根拠としての絶対他性」を主題化している。またこれを応用して木村敏は人格の自他同一性において一人称的な自己性のまとまりがあり、これを失うときに統合失調症などの症状があらわれるとしている。
- ・③脳科学において傍中脳水道灰白質（PAG=the periaqueductal gray）という特定の場所は全ての哺乳類に共通する古い領域で、Pankseppはこれを原初的な自己核 SELF（Simple Ego-type Life Form=単純な自己タイプの生命形態）の主要な中枢であるとした。
- ・④浅野孝雄は③を仏教の唯識理論とフリーマン・パンクセップ脳科学理論から解釈する。「アーラヤ識は PAG に対応し、マナ識は皮質および皮質下の高次の観察者を含む広い意味での SELF システムに対応すると考えられる」としている。
- ・⑤「あなたがたの心の内にキリストを住まわせる」（エペソ 3：17）。「キリストがあなたがたの心の内に形づくられる」（ガラテヤ 4：19）。「キリストがあなたがたの内にいる」（ローマ 8：10）。「生きているのはわたしではなく、キリストがわたしの内に生きている」（ガラテヤ 2：20）。

・高齢化社会にあって死生学を重視する。死すなわち「自己の消滅」を克服する道は④⑤においては「絶対の他」が「アーラヤ識」（仏法）や「イエス・キリスト」に置き換えられる点において「宇宙の法」「永続する自己」という宗教的（世界4の）リアリティを獲得する。この視点は自己-他者関係（世界3）からも重要である。

・利他主義が推奨される市民社会の形成は、自己利益の追求（lust=欲望の追求の是認）から自己-他者関係と empathy と mindfulness 重視の方向への教育の開発である。これが現代の産業界の思惑と一致するためには「絶えざる成長・拡大路線から低成長・ケアサービス産業への転換」への自覚が不可欠。